

果樹情報 第12号 (R7.9.25～R7.12.16)

県中農林事務所須賀川農業普及所・JA 夢みなみ(すかがわ岩瀬地区、あぶくま石川地区)

1 果樹の生育状況(令和7年9月15日時点)

(1) 須賀川農業普及所管内の果実肥大状況

りんご「ふじ」の果実肥大について、暦日対比、満開後日数対比共に、須賀川市・石川町で平年並、鏡石町では平年より小さい状況です。

表1 管内の各樹種における果実肥大状況 (令和7年9月1日現在)

樹種	品種(調査地点)	本年		平年		平年比	
		縦径 mm	横径 mm	縦径 mm	横径 mm	縦径	横径
りんご	ふじ(須賀川市浜尾)	75.8	87.3	75.7	84.6	100%	103%
	ふじ(鏡石町高久田)	71.2	76.0	75.2	82.6	95%	92%
	ふじ(石川町沢井)	74.5	83.5	74.6	81.8	100%	102%
	ジョナゴールド(石川町沢井)	73.9	86.1	76.2	86.8	97%	99%
	シナノスイート(石川町沢井)	75.0	84.4	73.0	83.1	103%	102%

(2) 果実の肥大状況(農業総合センター果樹研究所)

ア りんご「ふじ」の肥大状況

「ふじ」の果実肥大は縦径が73.4mmで平年比96%、横径が80.2mmで平年比96%と暦日対比及び満開後日数対比ともに平年並です。

また、9月8日現在(満開後137日)「ふじ」/マルバ台果実の外部裂果率は0%で過去3年間と比較して少なく、内部裂果発生率は13.3%と過去2年間と比較して少ない傾向でした。

表2 「ふじ」の裂果発生率

調査樹	樹齢	外部裂果率(%)				内部裂果発生率(%)			
		R7	R6	R5	R4	R7	R6	R5	R4
ふじ/マルバ台	23	0	0	3.3	3.3	13.3	6.7	26.7	30.0

2 栽培上の留意点

(1) なし

ア 「あきづき」の収穫

日本なし地色用カラーチャートで地色指数が4を越えると糖度は高くなるものの硬度が低下してシャリ感が消失する傾向があるため、収穫は地色指数 3.5～4で収穫するよう努め、遅れないように注意してください。また、収穫が遅くなると果肉障害が発生する危険度が高くなるので注意しましょう。

イ 「ラ・フランス」の収穫

「ラ・フランス」の収穫基準は表3を参考にし、収穫が遅れないように留意しましょう。

ウ 秋肥の施肥

中生種以降の品種では、落葉までの期間が短いので、収穫期中盤から収穫直後に実施しましょう。窒素肥料は速効性肥料を用い、窒素成分で5～10kg/10a 程度(「幸水」:中肥沃度地帯の場合)を施用しましょう。肥持ちの悪い土壌や有効土層の浅い土壌では速効性と緩効性のものを組み合わせて施用しましょう。

表3 「ラ・フランス」収穫適期の基準(平成28年度農業総合センター普及成果情報)

	生育日数(日)	地色指数	硬度 (lbs.)	デンプン指数※
基準	160～165	3.0	11	3.0～3.5

※高温年は、デンプン指数と成熟度の相関が低いことから、生育日数を判断基準としてください。

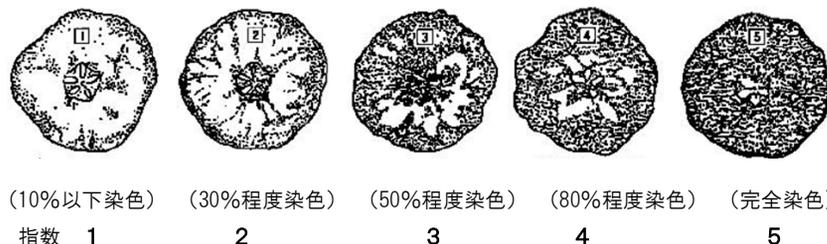


図1 「ラ・フランス」ヨード・デンプン反応と指数 (山形園試 1985)

(2) りんご

ア 「ふじ」の収穫前管理

1回目の葉摘みは、果実に接している葉を中心に数枚程度実施し、併せて玉回しを行いましょう。10月中旬以降の2回目の葉摘みでは、個々の果実に光が当たるように丁寧に実施しましょう。

反射シートの敷設は遅れないように実施し、枝の下垂が目立つ骨格枝等には枝吊りや支柱立てを行いましょう。

イ 中生種の収穫

地色、着色、デンプンの抜け、果実の肉質、食味等から総合的に判断し、品種特性に応じて収穫適期の品種から収穫しましょう。

3 病害虫防除

(1) リンゴ褐斑病・リンゴ炭疽病

8月中下旬における褐斑病の発生ほ場割合は県中・県南地方で平年よりやや高く(令和7年9月12日付け病害虫発生予察情報・発生予報第9号)、今後発生が急拡大するおそれがあります。本病は罹病落葉で子のう胞子が越冬し、翌年の伝染源となるため、越冬菌密度を低く抑えることが重要です。

防除暦に従い、十分量を散布し、防除を徹底してください。また、炭疽病の罹病果は二次感染により発生が拡大するおそれがあるため、見つけ次第速やかに除去しましょう。

(2) モモせん孔細菌病

本病は秋期に降水量が多いと翌春に春型枝病斑の発生が多くなる傾向にあります。越冬病原菌密度の低下を図るため、2週間間隔でボルドー液などの銅剤による秋期防除を降雨前に行い、越冬病原菌密度の低下を図りましょう。

秋期防除を効果的に行うためにも、実施前までに、秋季せん定を行い、薬剤透過の改善を図りましょう。

(3) ナシ黒星病

秋期防除は、翌年の伝染源となるりん片への感染を予防するのに重要であり、特にりん片生組織の露出が多くなる時期(10月上旬～11月上旬)が重要な防除時期です。

薬剤散布は、落葉率 80%頃を最終散布の目安とし、それまでに3回、薬液が棚上まで十分量かかるよう丁寧に散布しましょう。



図2 露出した芽りん片生組織(枠内)

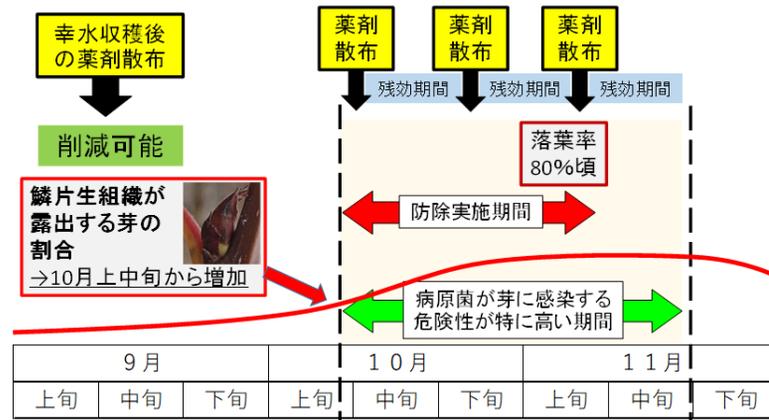


図3 ナシ及び病原菌の生態に基づく秋期防除の考え方

(4) モモハモグリガ

今後の気温が2℃高く推移した場合、モモハモグリガの第6世代成虫の誘殺盛期は、9月4半旬頃と予測され、第7世代の防除適期は9月5半旬頃と推定されます(表4)。

園地の状況を確認し、密度が高い園では越冬密度を低下させるために収穫後であっても防除を実施しましょう。

(5) ナシヒメシンクイ

近年、本種の第5世代によるナシの中晩生種の被害が散見されることから、「幸水」の果実被害が目立つ園では晩生種を対象に防除を実施しましょう。また、シンクイムシ類の被害果を発見したら摘除し、水づけ等により適切に処分しましょう。

(6) カイガラムシ類

ナシマルカイガラムシ第3世代のふ化開始は、9月2半旬頃と予測され、気温が2℃高く推移した場合、ふ化盛期は9月5半旬頃と推定されます(表4)。

カメムシ類対策等で合成ピレスロイド剤やネオニコチノイド剤等を多く使用している園地では、天敵類の減少によるカイガラムシ類の増加に注意しましょう。

(7) コスカシバ

本種による被害が多いモモ園では、必ず収穫後(9月中旬～下旬)に防除暦に従い防除を実施しましょう。

(8) 樹上越冬害虫

ナミハダニやコナカイガラムシ類などの樹上越冬害虫を誘殺するため、9月下旬頃に枝幹部に麻袋や飼料袋などを巻き付けて(バンド誘殺)、2月上旬に取り外して適正に処分するようにしましょう。

表4 果樹研究所における防除時期の推定(令和7年9月16日現在)

今後の気温予測	モモハモグリガ		ナシマルカイガラムシ	
	第6世代 誘殺盛期	第7世代 防除適期	第3世代 ふ化開始	第3世代 ふ化盛期
2℃高い	9月18日	9月22日	9月9日	9月22日
平年並	9月18日	9月24日	9月9日	9月24日
2℃低い	9月18日	9月25日	9月9日	9月26日

起算日:モモハモグリガ第5世代誘殺盛期8月28日(予測値)
ナシマルカイガラムシ3月1日(演算方法は三角法)